

子どもたちに童謡を教え継いでいこう

私の枕元にはポケットラジオが置いてあります。「NHK ジャーナル」をお布団の中で聴くためです。「NHK ジャーナル」は、夜 10 時から始まるニュース番組で、ニュースデスクと二人のアナウンサーが番組を組み立てながら、その日のニュースを解説付きで報じてくれます。ですから、目を閉じていても今日一日の動きが手に取るように分かります。

11月5日か6日のことです。この日は床に就くのが遅くなり、ラジオのスイッチを入れたのは、午後11時を大分過ぎていました。番組は、すでに「ラジオ深夜便」に入っていました。そのうちに「ナイトエッセイ」が始まりました。この日のエッセイストは中国人のソプラノ歌手でした。名はソン・チェンさんといいます。チェンさんは、文化大革命後ダーク・ダックスが上海公演をした折、初めて日本の歌と出会い、以来日本の歌の大ファンになったのだそうです。中でも童謡に強く引かれ、今もなお童謡の心を追求し続けているそうです。私は何となく聴いていたのですが、童謡という言葉を目にして、意識の目がだんだんと覚めてきました。

チェンさんは、次のようにおっしゃっていました。

「童謡は、メロディも歌詞も易しく作られているのに、どの歌を聴いても情景が浮かんでくる。童謡には、日本のやさしさ、日本のあたたかさ、日本の美しさ、つまり日本の心、日本人の美的感覚が息づいている。童謡を知れば知るほど、日本がより見えてくるようで、童謡の奥深さをつくづく感じる。日本と中国の架け橋になればと、これからも童謡を追い求めていきたい。」

私は無条件に共感しながら、チェンさんのお話を聞いていました。と同時に、私のまぶたには、いくつもの情景が浮かんできました。

夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る お手々つないでみな帰ろ 鳥と一緒に帰りましよう

あの町この町日が暮れる 日が暮れる 今来たこの道帰りゃんせ 帰りゃんせ

どんぐりころころどんぶりこ お池にはまってさあたいへん どじょうが出てきてこんにちは

鳥なぜ啼くの 鳥は山に 可愛い七つの子があるからよ

十五夜お月様ひとりぼち 桜吹雪の花かげに 花嫁姿のお姉さま 車に揺られてゆきました

シャボン玉とんだ 屋根までとんだ 屋根までとんで こわれて消えた

浮かんでくる情景は、場所はもちろんそこに登場する人の心も組み込みます。時刻も自ずと決まってきます。つまり、童謡は、情感、情緒を伴うのです。楽しかったり、嬉しかったり、寂しかったり、悲しかったり、情景に人の心が重なります。幾多の心を秘め、聴く人、歌う人に様々な情感を湧き起こさせます。童謡はそんな歌だから、童謡に耳を傾けるとき、童謡を口ずさむとき、私たちは少なからず心が揺さぶられるのです。それは、まさに感覚が目覚めであり、刹那であっても情緒を感じ浸る心のゆとりの誕生です。

今、毎日があまりにもせわしくて、情緒を味わったり情感を顧みたりすることがほとんどないまま時が流れてしまっています。一日の中に5分でも10分でも、時計の針をゆっくり回しながら情景や情緒を味わうゆとりを持たせたら、子どもたちの心がどれだけ潤うことでしょうか。チェンさんのエッセイに日本人の私が目覚めさせられたかたちですが、童謡に込められた日本人の心根のやさしさ、あたたかさ、こまやかさを、ぜひとも子どもたちに教え継いでいきたいものだと感じた次第です。

「当たり前」の中に「よさ」や「幸せ」が…

明けましておめでとうございます。新しい年を迎えました。世界は今、突如として訪れた大不況の波にさらされていますが、子どもたちにとっては、今年も心豊かにたくましく成長するための大事な1年に他なりません。新しい年が、子どもたちの知力、体力、心（徳）力をより一層進展させるすばらしい年になりますようにと願って止みません。

さて、今年もまた、たくさんの賀状をいただきました。その中には、皆様から届けられた賀状も数多く混じっています。

賀状は、一枚一枚、どれにも書いた人の思いがにじんでいます。その思いが状面にそれぞれの味を醸し出します。絵だけの賀状、大きな文字が二つ三つ配置されている賀状、小さな文字がびっしりと詰まっている賀状、縦15cm、横10cmの紙面全体が写真で構成されている賀状等々成せる形は様々ですが、どの賀状にもその賀状をつくり上げたその人の思いがにじみ出ています。賀状を手にするときは、1枚1枚その思いの汲み取りに努めてみたいものです。

手にした賀状は、いつの間にか私たちに語りかけ始めます。にぎやかに、あるいはもの静かに。同時に語る人の表情や周囲の光景も映し出します。やがて、賀状はその場の空気も伝えます。明るく、温かく、やわらかく……。皆様からいただいた賀状は、ことさら明るい空気、温かな空気を運んできてくれました。それは、元気なお子様の様子やご家族の皆様の笑顔がふんだんに盛り込まれているからです。どれを見てもほほのゆるみを覚えます。私自身、幸せ感に包まれます。家族のつながり、家族の絆、これに勝る幸せはありません。健康で家族みんなが手を取り合っていけること、実に当たり前のことです。しかし、この当たり前のことが、そのような状態に置かれていない人にとっては夢のまた夢なのです。

1月2日、富士市の無職の男が民家の郵便受けから年賀状21枚を盗んだとして、富士署に窃盗の現行犯で逮捕されました。男は調べに対して、「長年路上生活をしていて、家族もいない。正月に一人でさみしいので、年賀状の家族写真を見たかった。」と供述しているといえます。笑い話のような事件ですが、笑うことはできません。この人にもかつて家族はいたはずなのに、いや、今でもどこかに家族はいるかもしれないのに、この人は今後も家族と手を取り合うことなどないのだろうと思うと、この男の哀れさ、悲しさが浮かび上がってきて胸が詰まります。

電気は、停電が復旧したとき明るさ、ありがたさを実感します。水は、水道が断水したとき、そのありがたさに気付きます。家族も同様です。家族もいなくなったときその存在の大きさを知ります。あって当たり前、いて当たり前のことに今一度目を向けてみませんか。今まで気付かなかった幸せ感をあちこちで感知することができます。

実は、この感知は、私たちの感性の覚醒、感性の耕しです。私たちがこのような形で感性を揺り動かし目覚めさせれば、私たちは、今まで見過ごしてきたたくさんのよさ、素晴らしさ、美しさに気付きます。これはいうまでもなく、よさ、素晴らしさの掘り起こしです。よい、素晴らしいという目での見つめ直しです。

感性を揺り動かして、わが子を、「よい」「素晴らしい」という視点で見つめ直してみましよう。そして、たくさんのよさ、素晴らしさを見つけ出しましょう。いわゆるプラス発想でのわが子が見つめ直しです。自分のよさ、素晴らしさを、自分の親から教えられた子は、間違いなく親を信頼し、自らの意欲を湧き立たせることでしょう。

(平成21年1月)

相手意識 —— 相手存在意識・相手尊重意識

「明日から旅行に行きます。お手紙は家のポストに入れておいてください。」—「誰が。」「いつ。」…

A先生(小学校1年生担任)は、朝、教卓の上に乗っていたBくんの連絡ノートを開いて唖然としました。と同時に、自分がまるできつねにでもつままれたような、なんとも不思議な世界に足を突っ込んだような感覚に陥りました。

しばらくしてA先生は、我に返りました。そして、もう一度ノートを読み返しました。「誰が届けるの。」「いつ届けるの。」A先生は、相手に対してなのか自分に対してなのかよく分からないまま、心の中でもう一度叫びました。

もうお分かりだと思いますが、ポストとは郵便受けのことで、お手紙とは学校からの連絡物のことです。それを、いつ、誰が届けるというの。いつもは温厚なA先生も、次第に腹が立ってきました。やがて、このことは職員室でも話題に上り、いつしか全職員の知るところとなったのです。

さて、A先生はどうして腹を立てたのでしょうか。Bくんのお母さんが書いたノートをもう一度見てみることにしましょう。

① A先生は、「誰が届けるの。いつ届けるの。」と内言しています。小学校の先生は勤務時間こそ午後5時までですが、普段多くの先生が、明日の授業の準備やノートの点検、あるいは配付物の作成等で、6時、7時まで居残っています。放課後は子どもたちの委員会活動の指導や研修、校務分掌の会議などが入ってきて、自分の時間がなかなか持てないからです。A先生も例外ではありません。届けようにも届ける時間が見出せないのです。したがって、もし届けるとしたら、帰宅途中、夜道の回り道をしていくしかないのです。

② この文章は、前書き、前置きなどがありません。ですから、読み手は唐突感、ぶっきらぼう感を抱いてしまいます。後書きや後付けもありません。失礼感は否めません。

B君のお母さんはこのことを知っていたのでしょうか。書きぶりからすれば、おそらく意識の中にはなかったのでしょうか。だから、A先生との間に感覚のずれが生じてしまったのでしょうか。

昨今の社会の変化や生活様式、行動様式の変化は、地域近隣の連帯感を大きく後退させました。そのため、人々には、次第に自分で判断し自分で意思決定せざるを得ない場面が増えてきました。そのことは、個々の主体性を助長する点においては望ましいことではありましたが、その一方で、相手や周りの人々への気遣い感を減退させていきました。人々は次第に物事を自分中心に考えるようになり、それがひいては自分本位の言動を生ませるようになったのです。

私は、常々、人は誰も自分一人だけでは生きられないと思い続けています。自分が日々直接接する人たちだけでなく、間接的ではありますが、自分を取り巻く社会の仕組や制度にも一時も欠かすことなくお世話になり続けています。だから、私は、人はみな支えられて生きていると認識し続けています。この認識があれば、人には自ずと感謝の念が生まれてきます。感謝の念は、やがて尊重、尊敬の情を醸し出し、相手の存在をないがしろにしない思い、つまり相手意識を誕生させます。Bくんのお母さんに、本論に先立って「おはようございます。」とか「いつもお世話になっております。」などと一筆加える感覚や、「よろしくお願いたします。」などといって結ぶ感覚、いうなれば相手意識があったなら、A先生も、腹を立てるどころか何とかしてあげなくっちゃと、実際回り道もしてくれたでしょう。人間って、相手尊重意識を抱いている人からの申し出には、善意、好意で相対してあげようと思うはずだと考えているのは私だけでしょうか。

今遊ばなくて…，今群れなくて…

「Aちゃん，どうしたの。どうして泣いているの，Aちゃん。どうしたの……。ねえ，みんな。Aちゃん，どうして泣き出したの。誰か知ってる子，いない。」

「あのね，Aちゃんね，赤組さんの子にスクーター取られたの。」

「そうか，スクーター取られちゃったんだ。スクーターの取り合いで負けちゃったんだね。」

「ちがうよ。Aちゃんがね，鼻をかんでいたら赤組さんのBちゃんが乗ったんだよ。」

「えっ。それだけ。Aちゃん，だめって言わなかったの。今使ってるからだめって言わなかったの。」

「うん。何にも言わなかった。わーんって泣き出した。」

C先生は，大体の状況がつかめました。しかし，その一方で新たな心配が湧き上がってきました。そういえば，使っているおもちゃを持っていかれたとって大泣きしている子を昨日も見かけた。一週間くらい前にも見かけたような気がする。その子たちに共通して言えることは，ただ泣くだけということ。自分は何ら手を出さない。言葉も発しない。C先生は，何か重大な発見でもしたような，そんな気がしてきました。

C先生は，このことを園長や園務主任も同席する主任会で話題にしてみました。

「そういえば，うちのクラスでもそういう子，見かけるよ。泣くだけで，その他の自己表現をしない子とか，言い合いもそこそこにすぐ引っかいてしまう子とか……。自己表現が乏しいのは，友達とのかかわりの経験が乏しいからじゃないかな。すぐ引っかいてしまうのは，自分の意思をうまく伝えられないからじゃないかな。年少さんならそういうこともあるだろうけど……。」

「何かいら立っているなあ，疲れているなあと感じる子が増えてきたみたい。十分遊べていない。自分を十分出せないでいる。何か不完全燃焼のような，満たされていないような子が増えてきたように感じる。おけいこで振り回されているんじゃないのかなあ。5つも6つも行ってる子いるもの。」

「3歳，4歳，5歳ならもっと遊ばなくっちゃ。自分の意思で，自分たちの意思で，群れて遊んで遊び込んで，遊びを満喫しながらその中で知恵も知識も技能も体力も身に付けていくのに。自主性や主体性や社会性なんかも自分で育てていくのに。大人の敷いたレールに乗せすぎると，一見賢く育つように見えるけど，自分で判断したり処理したりすることが不得手な軟弱な子になってしまうと思うよ。」

子育てを経験してきている私は，そして，職業柄たくさんの子どもと親を見てきた私は，先生たちの発言に共感することしきりです。先生たちは実感と推測を織り交ぜながら話しているのですが，私の耳にはいずれもが実感として聞こえてきます。私の臉には，これまで出会った自立し切れない子どもたちの顔が次々と浮かんできます。子どもたちは，日に日に親の思いとは乖離(かいり)していきます。親は，自分の期待値からどんどん遠ざかっていくわが子にいら立ちを重ねます。家庭は冬の曇天のような空気に包まれ，時になじり合い，時に罵声が飛び交います。やがて，家庭は崩壊を始めます。

親とすれば，誰もがわが子にああなってほしい，こうなってほしいと願います。親ですから当然です。しかし，その期待が子どもの発達過程に沿わないものなら，発達過程に沿って生まれてくる欲求の発達を無視したものなら，どんなに手をかけても，どんなに願いを込めても，表れた子どもの姿は親サイドの欲望の偶像に過ぎません。親の玩具と化した子どもでしかなくなってしまうのです。

賢い親なら，子どもの10年先，15年先を見通します。10年先に義務教育を終え自分で新たな道を切り開いていこうとするわが子を，15年先に成人式を迎え大人社会に足を踏み入れていこうとするわが子を思い浮かべ，自立の大切さを実感します。そして，そのために，3歳，4歳，5歳の今大切なことは，五感をフル活用して遊ぶこと，たくさんの友達と群れて遊ぶことと心得ます。賢い親は，子どもの心を受けとめながら子どもの育ちを支えます。

思いは同じ、願いは一つ —— 幼稚園と小学校、育ちの連続性

「じぶんのことはじぶんでしましよう。」「おともだちをたくさんつくりましよう。」「きをつけてがっこうにきましよう。」

3枚の短冊を順に掲げながら、校長先生が子どもたちに語りかけます。子どもたちは、緊張気味に、校長先生の後について復唱します。「じぶんのことはじぶんでしましよう。」「おともだちをたくさんつくりましよう。」「きをつけてがっこうにきましよう。」

一昨日、私は、招かれて学区の小学校の入学式に参列しました。その日はまさに入学式日和。やわらかな日の光を浴びながら、校門を覆う桜の古木が、昨日まで爛漫と咲き誇っていた花びらを惜し気もなく門をくぐる親子の肩に振り掛けていました。私もあやかって花びらのシャワーを浴びながら、門をくぐって受付へと向かいました。

式が始まりました。「国歌斉唱」に続いて「校長先生の話」です。私は、校長先生の顔と子どもたちの顔を交互に眺めながら、校長先生が発せられる言葉と湧き出ずる自分の思いを重ね合わせていました。「じぶんのことはじぶんで…」——自分の支度や自分の持ち物の片付けはもちろんのこと、やっていいこといけないこと、やっていいときいけないとき、やっていい場所いけない場所を、自分で見極められる子になってほしい。そして、人からされて嬉しいときには「ありがとう」と、人に迷惑をかけたときには「ごめんなさい」と、また、してほしいときには「してほしい」と、されていやなときには「いやだ、やめて」と自分の口で言える子になってほしい。校長先生は、こんな思いも込めていらっしたのではないのでしょうか。

思いは私たち精華幼稚園も同じです。私たちは、子どもたちに、自分で遊び出せる子になってほしい、遊びに没頭できる子になってほしい、遊びをどんどん広げていける子になってほしいと願います。そして、自分の気持ちをそのまま出せる子になってほしいと願います。自分で遊び出せる子、遊びに没頭できる子は、もうそれだけで意欲があふれています。計り知れないほどのエネルギーを擁しています。意欲とエネルギーは、遊びたいという思いをもっと遊びたいという思いに押し上げます。もっと遊びたいという遊びの欲求は、やがてもっと大きく、もっと速く、もっと上手にという技能向上意欲を湧き立たせます。と同時に、どうしたらうまくいくのだろう、どうしたらもっと上手にできるようになるのだろうと、思考のエンジンに点火を始めます。さらに加えて、なぜこうなったのだろうと因果関係を追求し始めます。つまり、知りたい、分かりたい、納得したいという知的欲求を高揚させるのです。このことはまさに主体的な学びであり、もうすでに立派な自立の歩みです。子どもたちは、遊びに没頭し遊びを広げていくことによって、自ら知的欲求を喚起し、自ら学びを推進し、自ら自立を促進していくのです。

校長先生は、重ねて語ります。「おともだちをたくさん…」——友達がたくさんいれば楽しさも倍加します。毎日の学校生活に充足感が加わることを請け合いです。しかし、効果はそれだけに止(とど)まりません。それは、たくさん友達がたくさん「人」だからです。「人は人を浴びて人になる」とも「人は人の中で人になる」とも言われます。子どもたちがたくさんの人とふれあうことは、もうそれだけで豊かな人間性が保障されます。受容の心が養われ、周りの人を大事にしながら、また自分も大事にされながら、お互い上手に生きていける、共生していける素地を培っていくのです。

校長先生は、勉強の「べ」の字は一言もおっしゃいませんでした。それは、子どもは、自立の芽が育てば自分で意欲とエネルギーを生み出し、自ら学びと自立を促進させていくことを知っていらっしたからです。幼稚園も全く同じです。幼児は、知識も技能も知恵もすべて遊びを通して獲得し、自ら高めしていくのです。嬉しい、悔しい、悲しいといった喜怒哀楽の感情も、遊びの中で養われるのです。